

川崎信定教授を送る

川崎信定先生は昨年十二月に古稀の寿を迎えられ、平成十八年三月三十一日をもって、定年のため文学部教授の職を退かれることになった。ここに『東洋学論叢』第三十一号を「川崎信定教授退任記念号」として先生に献じ、東洋大学でのご尽力に感謝の意を表するものである。

先生は千葉県船橋市の真言宗豊山派の寺院出身であり、昭和三十三年に東京大学教養部教養学科（アメリカ分科）を卒業されてからは、東京大学大学院印度哲学修士課程および博士課程において専門的な印度哲学・仏教学の研究に着手された。その後、東京大学文学部（印度哲学）助手、東洋文庫専任研究員（チベット仏教学）を経て、昭和五十年から平成九年まで筑波大学助教授、教授として学究生活を送ってこられた。

平成九年度には笠井貞先生の後任として、東洋大学文学部印度哲学科教授に就任され、早々に印度哲学科の第二部主任、大学院文学研究科仏教学専攻主任、東洋学研究所長などを歴任され、東洋大学・印度哲学科の教育、研究を牽引されてきた。その間、宗教学、インド仏教、チベット語、チベット仏教に関する講義を担当され、多くの学生の教育に携わってこられた。

先生のご専門は日本学士院賞を受賞された「一切智思想の研究」で知られるように、インド及び仏教の智慧の展開をテーマにした思想研究であるが、一方では、「チベットの死者の書」をわが国に初めて原典から翻訳、紹介したベストセラー作家という側面をお持ちである。そのご研究はいずれも厳密な文献学に基づいたもので、一字一句をも疎かにしない堅実な研究態度は、学問の峻厳さを知る者のみが分かち合う明晰で透徹した境地を示され

ている。

川崎ゼミの唯識論書の講読や大学院のチベット文献の講読における緊張した雰囲気は、すでに学生達の語りぐさになっているが、時として周囲が驚くほどの厳しい言葉で、問題意識の確立を迫る先生の眼差しは、学生の生涯における厳しく、暖かい思い出になるであろう。われわれ教員にとっても、先生はそのような刺激を常に与えて下さっていた。まさにそれが先生の学風である。

現在、印度哲学科はインド哲学科と学科の名称を変え、次第に柔らかな雰囲気になりつつあるが、それも学科会議でのお茶菓子の差し入れや、春や秋に持参される切り薔薇のご奉仕といった先生のきめ細かいご配慮があったからこそである。

今後は周囲を喜ばせることよりも、ご自分のために薔薇園の中で過ごす時間をもう少し楽しみたいだきたいと思う。同時に仏教学の指導者としての責任を果たすべく、今後とも未知の研究に挑戦し続け、われわれ後学に灯火を点じ続けて下さることを衷心より念ずる次第である。

大学の規定によって、本年度末をもって先生をお送りしなければならないことになったが、ここに川崎信定先生の学恩に改めて感謝の意を表し、ささやかながら本論叢を捧げたい。

二〇〇六年二月末日

インド哲学科第一部主任 渡辺章悟